

各講演・レクチャーより

# 現代における平和・連帯・希望の哲学

——池田SGI会長の『法華経の智慧』に関する対話

カルロス・マヌエル・ルア

※本稿は2015年10月12日、東京・新宿区のTKP市ヶ谷カンファレンスセンターで行われた特別公開講演会の内容をまとめたものです。

本日はこのような機会を賜り、光栄に存じます。この場をお借りし、お招きいただきました池田大作博士ならびに東洋哲学研究所の皆さまに厚く御礼申し上げます。

このたび、美しい日本について来ることができ、私は幸せです。私は大学生のときに日本文化に出会い、

人生が変わりました。あまりにも好きになってしまい、とうとうアジア文化の学者になってしまいました。

アルゼンチンと仏教

「東洋哲学研究所」は、創立者の池田大作博士と川田洋一所長の陣頭指揮の下、アジアの文化遺産の保護・研究の促進に貢献されています。50年以上にわたる貴研究所の努力に対し、アジア文化の一研究者として感謝申し上げます。私は、アルゼンチンのサルバドル大学にある「東洋学学院」の院長を務めております。私

どもの大学は、イエズス会を設立母体とする高等教育機関です。カトリック教会のフランシスコ現教皇は、わがサルバドル大学のご出身です。教皇フランシスコは私どもの大学で教鞭を執ったこともあり、大学の発展にも力を尽くしてくださいました。

二千年余りの歴史を誇る日本と比べれば、地球の反対側のアルゼンチンはまだ歴史が浅い国です。しかし百年以上も前に、すでに仏教は日本人移民によってアルゼンチンに伝えられ、その後、学問としても研究されるようになりました。アルゼンチンでは、仏教研究の普及に草分け的な貢献をした方がいます。それは、「東洋学学院」の前身機関を開設したイエズス会のイスマエル・キレス神父（1906 - 93年）です。

キレス神父の奮闘のおかげで、私を含む多くの西洋人が仏教に、そして法華経の崇高な教えにめぐり会うことができました。また、私の場合、アルゼンチンのSGI（創価学会インタナショナル）と交流する中で、池田SGI会長の思想に出会い、会長が、深遠な法華経の哲学を「苦難を乗り越えるための希望と励まし」のメッ

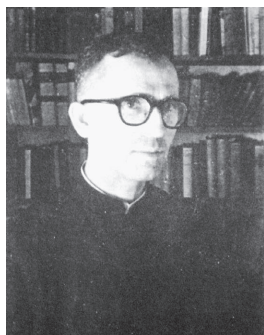
セージ」として現代人に贈っておられることを知りしました。

本日は三つのテーマについて話をさせていただきました。まず、アルゼンチン仏教史という観点から、キレス神父による東洋哲学の研究機構設置の意義について。次に、私もサルバドル大学「東洋学学院」の活動について。最後に、池田博士によって刷新され、深化した法華経のメッセージについてです。

イエズス会は古くから東洋との交流を進めてきました。イエズス会の共同創設者フランシスコ・ザビエル師は、1542年にインドに渡り、7年後の1549年に日本に来ています。共同創設者のもう一人は、イグナチオ・デ・ロヨラ師でした。ザビエル師はインドと日本を訪れ、ふたつの国の権威者（高官や僧侶）と、後世に語り継がれる「宗教間対話」を試みます。イエズス会出身の初のローマ教皇であるフランシスコ教皇も、かねてより宗教間対話と異教徒間の歩み寄りを強く推奨してきました。さらに一言、言い添えますと、フランシスコ教皇は故キレス神父の友人でもありました。

## 東洋哲学研究の先駆者

キレス神父は1906年7月4日、スペイン東部の町ペドラルバで生を受け、1922年にイエズス会に入会されています。10年後の1932年3月、結核を患うなか、アルゼンチン北部のサンタフェ州に派遣されます。1936年にイエズス会の司祭となり、同年、ブエノスアイレス州のサン・ミゲル神学校で神学の学士課程を終えています。1938年より、哲学史と形而上学史の教授として教鞭を執るようになります。のちに、キレス神父はサルバドル大学で哲学学部の学部長、さらに総長、名誉総長を歴任されます。数々の顕



イスマエル・キレス神父 (from Wikimedia Commons) ティエゴ・アバッド・デ・サンティジャン著 "Historia Argentina" (『アルゼンチンの歴史』)、1971年刊より

彰を受け、多くの名誉博士号が贈られました。1993年2月8日にブエノスアイレスで亡くなりました。

キレス神父は多くの哲学書を執筆され、再編された著作は39巻にもなります。注目すべき点は、神父が東洋文化に関心をもち、アジアとの文化交流を率先して推進したことです。『仏教哲学』(Filosofía budista) と題する著作で、東洋哲学の研究に打ち込まれた理由について言及されています。それまで20年間も西洋哲学を研究し教えてきた後で、東洋哲学へと向かわれたのです。やがて、初のスペイン語版法華経の序文を任されるほどの東洋哲学の大家となられたわけです。

『仏教哲学』には次のようにあります。「私たちは、西洋哲学に期待を裏切られたわけではありません。不満や憤りを感じているわけでもありません。それどころか、人類に対する西洋の文化貢献に対し、満腔の感謝を感じています。しかしながら、叡智の探求の道においては、人類が経験したすべての領域を分析する必要があります。西洋のみでは不十分なのです」「西洋思想の地平を越えて、別の世界について学び、しっかり

と見ていくべきです。私たちは常にその必要を感じてきました」と。

キレス神父は、1960年から翌年にかけて、その構想を実現する機会を得ました。「東西の文化的価値観の相互理解に向けて」というユネスコのプロジェクトを通して、アジアに長期滞在し、東京大学東洋文化研究所をはじめ、日本、台湾、インドネシア、インドの主要大学と交流することができたのです。日本での学術交流の窓口となったのは著名な仏教学者の中村元教授であり、神父は中村博士と親交を深めます。ちなみに、中村博士は創価学会創立者の牧口常三郎先生を大変尊敬しておられたようです。<sup>(3)</sup> 牧口先生は、日本人の思考が西洋哲学に染め上げられた時代にあって、日本の哲学界を精神的に守り抜いたからです。

東京大学を訪れたキレス神父は、東大図書館の蔵書の素晴らしさに驚きます。圧倒的な数の貴重な聖典や經典の前に、キレス神父は次のような感想を述べています。「東洋思想は西洋に、少しもひけをとりません。東洋が人類に計り知れない貢献をしてきたことの証を

見ることができました。感服しました」と。東洋哲学の体系的な研究が深く行われていたことに感動したのです。その後、キレス神父は東洋哲学の研究にさらに勤しみ、5年の努力の結果として『仏教哲学』を著しました。このことが評価され、日本の勲章を受章しています。

キレス神父は、人々に、コミュニケーションをとること、人と会うこと、連帯することを促す方でした。次のように述べています。「私たちのこの集いは、真のコミュニケーションが行われているからこそ成り立っています。真のコミュニケーションは、互いに共通点を見出す作業です。上下関係や差異にとらわれず、互いに対等な存在として和合することです。交わりの意味をもつ『コミュニケーション』という単語は、『コミュニティ』と『ユニオン』という語源からなっています——『コミュニティ』は連帯する共同体、社会を指し、『ユニオン』は結ぶこと、連帯、和合を指しています。人間は画一的に等しい存在ではないため、それぞれの考えが異なることを認め、受け入れ、尊重することが

大切なのです」と。

さて、1967年、キレス神父はサルバドル大学に「東洋学学院」を開設しました。その目的は、西洋における東洋哲学研究の拠点にすることでした。現在、私どもの学院には三つの課程があります。「東洋学研究の学士コース」「ヨーガの専修コース」「現代中国研究の専修コース」です。設立から48年。私たちは様々なアジア文化の専門家を育てながら、セミナーや講演会などを通して東洋文化の普及に努めています。歳月を重ねるにつれて、アジア・中東文化研究の重要機関として西洋で認められるようになったことは、私どもの誇りです。

### 法華経の卓越性とは

昨年（2014年）の9月25日から10月6日まで、アルゼンチンSGIとの共催により、サルバドル大学で「法華経——平和と共生のメッセージ」展を開催させていただきました。仏教の伝統と法華経の深遠な教えに直接触れる貴重な機会となりました。私は、敦煌の

壁画や、7世紀にランプを付けた竹笈<sup>たけかぶ</sup>を背負いながら天竺へ旅した玄奘三蔵<sup>げんじようさんざう</sup>を紹介するパネルを見て、その時代に引き込まれるような思いでした。そして、日蓮聖人の真筆（複製）や、サンスクリット、中国語、モンゴル語や日本語などで記された法華経の多様な写本を拝見しました。これらは、仏教精神への理解を深め、『法華経』のメッセージを世界に広げていくためのこのうえない資料であります。「東洋哲学研究所」のスタッフの皆さまに、重ねて感謝申し上げます。

八万法蔵と呼ばれる膨大な仏教經典の宇宙の中で、無上の宝玉として輝いているのが法華経です。法華経がかくも優れているゆえんは何でしょうか。それは、絶え間なく変化し続ける大宇宙の本質を解き明かしているからです。その本質は、時を超えて不変であり、しかも驚嘆すべき多様な現れ方をします。それは無限の可能性をもっています。そして、私たち人間の瞬間の生命に、それがすべて凝縮して具わっているのです。

法華経が傑出している理由はもうひとつあります。

いかなる生命であろうと、「仏性」という最高の境界が内在していることを説いているのです。だれもが「今」「ここで」、自己の限界を破って宇宙大の次元へと開放



アルゼンチンの首都ブエノスアイレスにあるサルバドル大学東洋学学院のルア院長。同学院はラテンアメリカにおける東洋哲学研究の中心的拠点のひとつ

され、秘めていた永遠の力を發揮できるのです。法華経が示す普遍の法は、生きとし生けるものすべてを、差別なく、わけ隔てなく、仏界へと目覚めさせるのです。

日本は仏教の発展において重要な役割を果たした国です。日本の仏教伝来は千五百年前に遡ります。それ以来の多くの仏教思潮の中で、私は特に日蓮聖人の精神遺産を受け継ぐ流れに着目しています。

現在、人間はテクノロジーの世界に生きています。その世界では、人間が物質をすべて支配できるかのようになっています。しかし、大自然が人間を我に返します。例えば、異常気象の危険を前にすれば、人間のちっぽけさを感じずにはいられません。環境を破壊したことが悔やまれます。人間はどうすればよいのか。人類はどの方向に進むべきか。そのような問いかけを、池田博士は『法華経の智慧』と題したご著作で探求されています。池田博士はこう語っておられます。

「『経済の成長』を至上命令にしてきた現代にあつて、より大切なのは、『人間』が根本」、つまり「人間の成長」ではないのかと気づき始めています。「知識の飛躍的増

加」が進む情報社会にあって、知識を使いこなすための「智慧の飛躍的増大」が、至急になされなければならないと理解されつつある<sup>(4)</sup>と。

どうすれば変革を開始できるのか。人類が直面する諸課題の克服を目指して、池田博士は、法華経についての感嘆すべき考察を重ねておられます。

### キリスト教と仏教の「善悪観」

私は子どものころ、キリスト教徒として、神は「全能」かつ「無限の善」の存在だと教わりました。その時、根本的な疑問がわきました。「この世の中には不幸と悪が溢れている。神が善であるなら、なぜこんな世界を創ったのだろう。神は本当に全能なのだろうか？ 全能でありながら、意図的にこのような世界を創ったのなら、神は善とはいえないのではないか」などと、頭を抱えました。「善と喜びだけの世界はなぜ存在しないのか」「悪・苦しみ・不安のない世界がなぜ創られなかったのか」。だれもが知りたいことではないでしょう。この問いに対し、私はふた通りのアプローチをし

ました。最初は、西洋文化の中で育った者として、理論的なアプローチを。やがて、仏教を研究するようになり、実践的なアプローチをとるようになったのです。

『聖書』の「創世記」を開くと、エデンの園には悪を象徴する蛇がいます。楽園が楽園であるためには蛇の存在は欠かせません。言いかえれば、蛇なしでは楽園は楽園として完成しないのです。悪のない完べきな世界は、楽園ではなく、神そのものになってしまいうからです。

地獄についても同様です。善を潜在させていない地獄はありません。地獄は絶対的な悪の世界ではなく、欠陥のほかには何もない世界でもないので。例えば、チベットの仏画には、地獄とともに、普遍的な真理を体現する仏が描かれています。また、池田博士も『法華経の智慧』で「大悪があるからこそ大善がくるのだ」と述べておられます<sup>(5)</sup>。さらに、「仏と提婆とは身と影とのごとし生<sup>しょうじょう</sup>生<sup>しょうじょう</sup>にはなれず<sup>(6)</sup>」（仏と仏に敵対した悪の提婆達多とは、身体と影のように離れず、常に一緒に生まれてくる）の言葉を引いておられます。



理性の限界を超えた真理へ

善と悪についての探求を続けると、さらなる疑問がわきます。「神は何のために世界を創造したのか?」「なぜ、さまざまな現象があるのか?」「なぜ世界が存在するのか?」、つまり「なぜ我々は存在するのか?」という問いかけです。私たちはまさに、ハイデッガーの有名な問い「なぜ無ではなく、何かが有るのか?」に行きつくのです。

神学的に言えば、神の天地創造のわざには、いかなる束縛もありません。創造主は無限に全能なため、完全に自由自在に創造するのです。必要性から創られて創造しているわけではありません。神がなすことに条件はないのです。そうだとすれば、万物がなぜ存在するのかと人間が悩むのは意味がないことになります。そのような疑問は人間の発想にすぎないのです。人間に理論的思考がある限り、やむを得ない問いかけなのかもしれません、神学的にはすべてをあるがままに受け入れていきます。人間の理性的思考には、限界があるのです。

その点、仏教は、理性の原則を基礎とする形而上学とは正反対です。ある意味で、「理性の無力を原則とする世界」と言えます。仏教においては、人類一般にも個人にも、特定の存在根拠とか第一原因というものはないのです。仏教は、世界についての真の知識を「知ることとはできない」とし、理性によってとらえられた世界観を解体して、日常的現実から離れた次元から存在論を展開します。こうした客観世界の解体は、しかし、「(一切衆生の)救済」のためなのです。すなわち、相対的世界とその観点から離れて、より高い真理を目指すのです。概念でとらえることも、言葉で表すこともできない絶対的真理への探求です。この点に関連して、池田博士も言われています。「仏法は深い。言は意を尽くさず<sup>7</sup>と言う」と。

この真理追求の中で、仏教思想は、絶対(無限)的存在と相対(有限)的存在の両方を同等のものと見なす逆説的な思想を確立しました。こうした性質こそが、宇宙の法則であるとするのです。万物を映し出すこの法が森羅万象を結びつけ、(有限の)万象ひとつひとつが



(無限の) 全宇宙の秩序を宿しています。存在するすべてが、本然的に仏性をもっているのです。この真理を知ることが、悟りです。法華経は、一切が驚くべき相互関係で結ばれていることを明らかにしています。また、万象すなわち個々の生命は、究極の生命すなわち宇宙の大生命そのものと一体であると説きます。各部分はそのまま全体であり、生命の無限の可能性を蔵しているのです。

先ほど述べたように、真理に対して私は(理論的と実践的という) ふたつのレベルを考えてきました。後年、龍樹の哲学を学ぶ中で、それがさらに明瞭になりました。すなわち、日常の言語や概念によって認識される「相対的真理」と、人間を真理と解放に導く、超越的な「絶対的真理」のふたつがあることを、彼は説いたのです<sup>(8)</sup>。絶対的真理は日常の言葉では説明できないことを私は理解しました。彼は、夢の比喻を述べています。睡眠中には、それが事実であるかのごとく思えて、夢が夢であることを理解できません。覚醒した状態から見たほうが、夢の本性がわかるのです。それと同様に、

日常の体験もそれが幻想であるゆえに、そうとは自覚できません。苦悩からの解放——仏教でいうところの「涅槃」です——の境涯から見て、はじめてそれがわかるのです。

法華経の「方便品」に次のような一節があります。

「止<sup>や</sup>みなん、舍利弗<sup>しやりほつ</sup>よ。復た説くを須<sup>もち</sup>いず。所以<sup>ゆえん</sup>は何ん。仏の成就<sup>じじょうじゆ</sup>したまえる所<sup>ところ</sup>は、第一希有難解<sup>けううなんげ</sup>の法なり。唯だ仏と仏とのみ乃し能く諸法<sup>じよほふ</sup>の真相<sup>じつそう</sup>を究<sup>く</sup>尽<sup>じん</sup>したまえり。所謂<sup>いふ</sup>る諸法<sup>じよほふ</sup>の、如是相<sup>にやぜそう</sup>・如是性<sup>しやう</sup>・如是体<sup>たい</sup>・如是力<sup>りき</sup>・如是作<sup>さ</sup>・如是因<sup>いん</sup>・如是縁<sup>えん</sup>・如是果<sup>か</sup>・如是報<sup>ほう</sup>・如是本末究竟等<sup>ほんまつくきやうとう</sup>なり」<sup>(9)</sup>

また、「方便品」には次のような一節もあります。

「諸仏世尊は、唯だ一大事の因縁<sup>いんえん</sup>を以ての故に、世に出現<sup>しゆけん</sup>したまう……諸仏世尊は衆生をして仏知見<sup>ぶつちけん</sup>を開かしめ、清浄<sup>しやうじやう</sup>なることを得しめんと欲するが故に、世に出現<sup>しゆけん</sup>したまう。衆生に仏知見を示さんと欲するが故に、世に出現<sup>しゆけん</sup>したまう。衆生をして仏知見を悟らしめんと欲するが故に、世に出現<sup>しゆけん</sup>したまう。衆生をして仏知見の道に入らしめんと欲

するが故に、世に出現したまう」<sup>(10)</sup>

人間が何らかの絶対的な真理に根差して生きるようになるのは、概念的に理解した結果ではなく、実践の結果です。教義というものは、その説き方が洗練されているから価値があるわけではありません。それが人間の生き方を変え、生活の質を高める力をもつていてこそ素晴らしいのです。理論上の議論や形而上学的思索は、私たちを実践へと導くためのものであり、真理に向かつて私たちを前進させ、私たちの精神を向上させてくれるものなのです。

この意味で、法華経を中心とする仏教思想は二千五百年の歴史のなかで、人々の実に多様な体験によって豊饒なものとされ、現代社会に伝わりました。仏教の教えはすべての人間の幸せのために説かれたものであり、それを実践するのには、差別は一切ありません。性別、人種、学歴、社会的地位、権力、財力も関係ありません。仏教は、ありとあらゆる人々が等しく最高の幸せを切り開くために説かれたのです。ここにこそ仏教の真の力があり、法華経のまことの智慧があります。現代の

世界においても、人間はいにしえから変わらぬ悪に苦しめられ続けています。しかし仏教は、人類がより高き目標を目指して生きることを可能にしてくれる教えであり、このメッセージを地球のすみずみまで届けようという信条をもっているのです。

### 「価値創造力の豊かな人格」

講演を結ぶに当たり、ぜひとも牧口常三郎先生の著作への感想を述べておきたいと思います。20世紀前半に先生が危惧していた教育の課題は21世紀に入った今も変わっていません。ひとことで言えば、「価値観の欠如」です。牧口先生の次の言葉を讀んだとき、「これこそ、教育者としての私の仕事を導いてくれる指標である」と感じました。「人間には物質を創造する力はない。吾々が創造し得るものは価値のみである。所謂<sup>いわゆる</sup>価値ある人格とは価値創造力の豊かなるものを意味する」<sup>(11)</sup>

現在、私は教育学の博士課程で学んでいます。博士論文のテーマに選んだのは牧口先生の価値思想と業績の分析です。このテーマを扱うスペイン語での博士論

文は、これまでなかったと思います。

最後に、今回、来日できましたことへの感謝を重ねて申し上げます。また、池田博士に深甚の敬意を表したいと思います。博士のたゆみなき対話と平和への尽力、よりよき世界へのご努力——現代の世界において、これに比肩できる指導者はほとんどいないでしょう。

今日、私たちは気候変動の問題にも取り組みねばならなくなってきました。良い解決を願うならば、人類は団結して立ち向かわねばなりません。フランシスコ教皇が回勅「ラウダート・シ」<sup>(12)</sup>で言われている通りです。

世界平和の実現は一人ひとりの日常の小さな努力によって前進します。地道な努力の継続こそが、より公正な社会の建設を可能にするのです。そのようにして、「幸福」は探し回るものではなくなり、だれもが実感でき、だれもがその実感を口にするものとなることでしよう。その意味で、宗教は間違いなく重要な存在です。各人に自己の人生の意味を感じさせるものだからです。

具体的な「一人」へのかかわり

池田博士は、『法華經の智慧』で、「ロゴセラピー (logotherapy)」（意味中心療法、実存分析）の創始者である心理学者ヴィクトール・フランクル博士の言葉を何度か引用しておられます。フランクル博士は、著書『夜と霧』の中で、「人生の意味」について次のように述べています。「人生の生活の意味は決して一般的に述べられないし、この意味についての問いは一般的には答えられないのである。ここで意味される人生は決して漠然としたものではなく、常にある具体的なものである。各人にとって唯一つで一回的である人間の運命は、この具体性を伴っているのである。如何なる人間、如何なる運命も他のそれと比較され得ないのである」<sup>(13)</sup>

この点、日蓮仏法と法華經は、具体的な人間一人ひとりの善き友たるべきことを強調しています。明快に主張されているのは、周囲の人が苦悩や苦痛を抱えているかぎり私たちは幸福になれないということであり、具体的な行動によって同胞である人々に手を差し伸べなければならないということです。また、苦悩から解

放され幸福になれるのだというメッセージを人々に伝えよということ。だからこそ、「現代という時代にとって、法華経のメッセージは絶対不可欠のものである」と私は確信しているのです。

#### 訳注

- (1) 東洋学学院のスペイン語公式名は *Escuela de Estudios Orientales "Rev. P. Ismael Quires SJ"* (イエズス会司教イスマエル・キレス神父「東洋学学院」)。
- (2) キレス神父が1944年に設立した哲学高等学院 (*Instituto Superior de Filosofía*)。
- (3) 中村元「奴隷の学問をのり超えて——比較思想における挫折と実現」(『比較思想研究』第15号、比較思想学会。のち『比較思想の軌跡』(東京書籍、1993年)所収)。
- (4) 聖教ワイド文庫版『法華経の智慧』(以下、同書の引用はすべて同版) 第1巻、8頁、聖教新聞社。
- (5) 第3巻、231頁。創価学会版『日蓮大聖人御書全集』1300頁の「大悪をこれば大善きたる」に基づく。
- (6) 第3巻、269頁。引用文は『日蓮大聖人御書全集』230頁。
- (7) 『法華経の智慧』第1巻、55頁。
- (8) 龍樹は『中論』において、世俗諦(俗諦)と勝義諦(真

- 諦、第一義諦)の「ふたつの真理(真俗二諦)」に依拠して仏は説法したと論じた。
- (9) 創価学会発行『妙法蓮華経並開結』108頁。
- (10) 同、120・121頁。
- (11) 『創価教育学体系』第1巻(第三文明社刊『牧口常三郎全集』第5巻、13頁)。
- (12) 2015年6月18日に発表された回勅。地球という共通の家を守る方向に人類は変わらなければならないと「環境的回心」を呼びかけている。「ラウダート・シ」は「主を賛美せよ」の意味。アッシジの聖フランシスコの「太陽の賛歌」を踏まえている。賛歌では、太陽や月、水、大地など神が創造したすべてのものを通して、神を賛美している。
- (13) みず書房刊『フランクフルト著作集1』霜山徳爾訳、改版183頁。

(Carlos Manuel Rúa / サルバドル大学東洋学学院院長)